

町史の発刊に当って

この度多年の念願でありました大豊町史を刊行することができましたこと、町民の皆様と共に心から祝福いたしたいと存じます。

変転きわまりない世界状況の中で吾が国もまた目まぐるしい移り変りを見せております。物質文化の波に押し流されて、人間の心まで喪いつつあると言われる世相の中で、大豊の地に生れ、育ち、そしてこの地に還る私共として厳しい自然のなかで山を拓き、文化を求めた遠い祖先を偲ぶことは誠に意義のあることです。

昭和二十四年、旧西豊永村において村史刊行の企画があり、郷土の史家故西村自登先生に編纂を委託されました。昭和三十年大豊町発足後も引つづきこれを継続したのでありますが、不幸にして西村先生の死去に伴い、中絶の止むなきに至りました。

しかし御熱心な関係各位の御懇慫により、再度編纂の機運起り、昭和四十八年町文化財保護委員による町史編纂の専門委員が発足、一方西村先生多年の労作になる草稿の譲渡をうけることができ、これの取りまとめを高知県文教協会橋詰延寿先生に委嘱、これの完成をまわって委員による編纂作業となったのであります。

爾來滿一ヶ年、委員の方々には昼夜の区別なく苦勞を重ねられました。また写真もできるだけ入れ、完成したのがこの町史であります。

本来なら明治以降についてもふれるべきですが余りにも資料の尨大なること、刊行の時機を急いだことなどにより、この度は古代近世編として上古より明治維新に至る迄に止めました。何れ近代編の発刊も近いことを信じます。

本史の刊行にあたり故西村自登先生の多年の御勞苦を謝しその御冥福を祈ると共に橋詰延寿先生、編纂に当られた委員、関係者、また貴重な資料の御提供を頂きました町内外の皆様にご心から御礼を申し上げます。

本書が輝かしい大豊町発展のための心の糧となることを祈念して序といたします。

昭和四十九年三月

大豊町長 門田盛一郎

町史発刊を祝す

この度故西村自登先生の遺稿をもとに、橋詰延寿先生はじめ関係各位の絶大なる御努力により、待望久しかった大豊町史（古代近世編）の上梓をみましたことを衷心よりおよろこび申し上げます。

今更申上げる迄もなく郷土史編纂の目的は、私共の郷土がどのようにして成立し、どのような条件のもとで、どのようにして今日に至ったかを瞭らかにし、今後私共の郷土をより発展せしめ、存続させる為の方策を考えることにあると存じます。

しかしながら従来の歴史はともすれば支配者の年代記、少数英傑の列伝の組合せ、云い換えれば治者の歴史であって、大多数を占める被治者の歴史は遺憾ながらきわめて少なかったのであります。

本史はこうした点にも着目せられ、数百年に亘る治乱興亡の時代の中で、踏まれても、叩かれても、たくましく雑草の如く生き抜き、大豊の地を守り育てた庶民の生活に焦点を当て、しかも躍動的に描写されていることに大いに共感をおぼえる次第であります。

とかく郷土史の編纂にあたっては資料の乏しいことに悩みがあり、その収集には格別の辛苦があるのでありますが、故西村先生の十数年間に及ぶ研究と関係者の数年間の御努力はこれを解決して

尚余りあります。

歴史は世の鏡であり、史蹟は世の轍であると言われます。郷土を知ることが郷土愛の発展につながることであり、この愛のある限り大豊町の進展があります。

吾が国伝統の美しい文化が、特に精神文化が次第に毒され、崩れつつある今日、本史が更に郷土の歴史を研め、その蹟を訪ね、明日の大豊町を考えるその端緒となる為にも、より多くの人に愛読されんことを念願し、且つ本史編纂に当られました町教育委員会はじめ関係者に改めて深甚の敬意と謝意を表し発刊の御慶びと致します。

昭和四十九年三月

大豊町議会議長 寺 石 由 雄

序

「ゆく河の水の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまる例^{ためし}なし。世の中にある人と栖^たとまたかくの如し。」

『方丈記』 鴨 長 明

未来への発展のために常に新しい物を求め、真理を探求しようとする私達の意欲は、その第一歩としてまず、「古きを温ねて新しきを知る」ことから始めたのであります。

過去から未来へと無限の時の刻みの中で現在のおかれている意味を見極めるとともに、過去の歴史を顧みること、決して等閑にすることはできないと思います。

私達が現在生活しているこの土地が、如何にして現在のように発展したのか、その歴史の中で農民達の汗と膏に塗れた努力が、今日の発展の基盤を築いた事に思をいたし、将来への飛躍を図るべきだと思ひます。

その意味で、今般大豊町が町史の編纂を企図せられ、昭和四八年四月町史編纂委員会を発足させて、その事業を軌道に乗せられたことは、洵に慶ばしいことでありました。

不肖の私達が、この大業の拝命を受けて一年を閲し、漸く脱稿して本日上梓の運びになりました。

た。このことは偏に諸先輩の方々の御指導の賜と、茲にその編纂の経緯を記して、厚く御礼を申し上げます。次第であります。

本町史の基礎となった草稿は、大豊町合併以前から、町内に散在する資料や古文書を漁り、町史の編纂に心血を注がれていた、故西村自登先生の遺稿であります。

志半ばにして仆れられた先生の意図を体しながら、その遺稿に加えて県文化財保護委員の橋詰延寿先生に、大豊町のおかれていた、その時代の歴史的背景と、全国的な視野に立っての専門的考証を、広く補筆して戴きました。

特に先生は、斬新な試みとして、大豊町に五つのシンボルありと大きく前面にとり挙げられていることは、時代の重複と云う反面があるにせよ、寔に画期的なことでもあります。

その上に都築建康編纂委員長をはじめ、各委員の方々や渡辺教育長にそれぞれの分担をもって、郷土史的な面や農民達の生活・風俗・口碑等について筆を加えて戴きました。加筆の原稿を処々へ挿入し、文脈と文脈の調和を図り、又繋ぎの文章を入れるために、先生方の折角の玉稿を勝手に改竄して汚しましたことを紙面を藉りて御詫び致します。

私達はこの町史を歴史の専門書としてでなく、町民の皆様に親しんで貰え、気易く繙いて貰える町史にしたいと念願しておりました。そのためには史書に名の誌されている堂上人や部将の生活だけでなく、私達の先祖の名もない農民が山を削り、田を拓き、孜々として額に汗したさまを描き出

しなかったのであります。しかし実際には編集期間が八ヶ月足らずであり、徒に字句の推敲のみに追われ、その上非才のために意に副うことができませんでした。

本誌発刊の暁は、皆様の忌憚のない御叱正を得て、下巻（明治維新〜現代）編纂の糧と致したいと存じております。

町史を上梓するに当り、資料の蒐集や編纂について種々と御協力を賜り、御指導を戴いた方々に心からの謝意を表し、本誌の完成をみずに他界されました西村自登先生の御霊に対し、衷心から御冥福をお祈りして擲筆します。

昭和四十九年甲寅三月一日

大豊町史編纂委員会

文責 石 原 正 恒